

# ZENBI フォーラム

01

江上ゆか  
歴史資料ネットワークについて

F-01

02

高橋瑞木  
あの時の水戸芸術館、いま、そしてこれから

F-04

03

稲庭彩和子  
ケアの場としての美術館―認知症の方のためのプログラム―

F-06

04

池上野司  
もつと野性を  
「榎忠展 美術館を野生化する」 兵庫県立美術館 2011年10月12日―11月27日

F-10

05

逢坂恵理子  
ヨコハマトリエンナーレ2011を巡って

F-13

全国美術館会議による東日本大震災の文化財レスキュー活動のうち、筆者は、陸前高田市立博物館で被災した美術品の救援活動に参加した。広範囲に及ぶ甚大な被害の前に、救援活動は、さまざまな困難と課題に行きあたりつつ進んでいる様子が、一参加者の立場からもうかがわれた。全美の活動における諸々の問題は、いずれシンポジウムや報告書等により検証されることになるが、他団体の場合はどうであったのだろうか、活動の場では接点が多かっただけに、率直に知りたいという思いがわく。

2011年3月31日付の報道資料によると、文化庁が主導する文化財レスキュー事業には、全美ほか13の関係団体が名を連ねている。そのひとつに文化財救援ネットワークがある。これは被災地をはじめ、全国各地で活動する歴史資料系ネットワークのことを指す。うち1995年1月17日の阪神・淡路大震災を機に最初に兵庫で立ち上がったのが、歴史資料保全情報ネットワークだ（1996年4月に歴史資料ネットワークと改称、略称「史料ネット」）。筆者の勤務先と同じ神戸にあって、たとえば近年では2009年台風9号による兵庫県佐用町の水害等で小回りの効いた救援活動を展開していることを、耳にはしていた。全美とは組織体制も対象資料も違うだけに、参考となる点も多いのではないか。まずは身近なこの団体について詳しく知るべきかと思い、9月26日、副代表の松下正和氏（近大姫路大学講師）を訪れ、お話を伺った。以下、松下氏のお話をもとに、史料ネットの設立から現在までを紹介したい<sup>※1</sup>。

設立は震災から約半月後の1995年2月4日<sup>※2</sup>。博物館等のハコモノの外にあってなかなか行政の手が回らない民間所在の歴史資料を救おうと、京阪神の歴史系学会や大学に所属する若手研究者を中心に、自治体の文化財担当職員、地域の郷土史家も加わり、つまり自然と官・学・民が連携するかたちで発足。尼崎市立地域研究史料館に事務局を置いた（1995年6月、神戸大学に移転）。そもそもこのきっかけは、現在も代表をつとめる奥村弘氏（当時、神戸大学文学部助教授、現・同大学院人文科学研究科教授）が、地元NGO救援連絡会議の文化情報部としていち早く被災地で活動していた坂本勇氏を紹介する報道に触れたことだという。

被災地の随所に救いを待つ資料があるはずなのに、当初、救出の依頼は非常に少なかったそう。そこで史料ネットでは、巡回調査を開始する。調査の過程で浮き彫りになったのは、歴史資料についての認識の「ずれ」であった。地域の住民は、自分の家にある古い書類や写真が、まさか救出されるべき貴重な「文化財」であるとは思わない。そして当時は、たとえば昭和期の文献が歴史資料にあたるのか等、実は住民以上に研究者の間に大きな「ずれ」があったという。こうした「ずれ」が「ずれ」として認識あるいは修正されていく背景には、当時の歴史学全体の動向もあったと考えられるが、研究者自身も実際に救出活動を進めていくなかで、地域に固有の歴史資料の意味や価値、その重みを再認識し、「ずれ」を修正していくことになったという。

文化庁等による救援委員会と同様、はじめは史料ネットも、ある一定期間の救出作業が終われば活動は収束するように考えていたらしい。だが、上記のような経験を経て史料ネットでは、歴史資料とは何であり、なぜ大切なのか、いざ災害が起こった時だけではなく、平時から地域住民とともにその意味や価値を考え伝えることこそ、文化財救援活動の基本であるとの認識に至り、市民講座等の場を設けて発信を続けていくこととなる。

さらに史料ネットは神戸での経験を生かし、各地での同様のネットワークの立ち上げに力を貸すようになる。たとえば2000年の鳥取県西部地震を契機に山陰歴史資料ネットワークが、2003年の宮城県北部連続地震の後にはNPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（略称「宮城資料ネット」）が設立されている。風水害が相次いだ2004年以降は水損史料の救援活動にも力を入れるようになり、その経験は東日本大震災における津波被災資料の救出活動に生かされることとなった。

※1

あわせて文化財保存修復学会編『文化財は守れるのか？「阪神・淡路大震災の検証」』（1999年、クワプロ）等の文献も参考にした。

※2

全美と文化庁が協同で被災地内の美術館へ救援隊を派遣したのは2月6日から12日。「阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会」の発足は2月17日である。

東日本大震災においては、史料ネットは、地元の宮城資料ネットからの協力要請に応えるかたちで救援活動に参加。4月25日から27日にかけて宮城県農業高校所蔵の書籍を東北芸術工科大学に搬送し、水洗・冷凍処置する作業を行った。東北芸工大には山形文化遺産防災ネットワーク（2008年1月設立）の事務局があり、ネット同士の連携プレーによってこの流れは実現している。ちょうど救援委員会が最初の文化財レスキュー事業として石巻文化センターでの作業にとりかかっていた、ほぼ同時期のことだ。なお宮城県農業高校の書籍については、5月29日から30日にも宮城・山形・神戸ネットの合同チームで救援活動を行っているが、このときは文化財レスキュー事業の一環として実施したので、仙台市内の大型冷凍保管倉庫へ救出資料を一気に搬入できたという。また岩手県内については、考古系の研究者を介して、岡山史料ネット経由で神戸の史料ネットあてに歴史資料の保全についての照会があり、陸前高田市の海と貝のミュージアム及び市立博物館の歴史資料の救出活動に、神戸・山形のネットが参加している。

なお神戸の史料ネットでは、恒常的に活動を継続するため、2002年より会員制をとり、現在約300人の会員により支えられているが、事務局の実働としては数名体制とのこと。山形ネットに至っては、ほぼ個人で運営されているようだ。少数のコアメンバーが迅速に意志決定を行い、地域の、また全国のネットワークを活用することで活動の流れをつくる。小規模な団体ならではの機動力の一方で、活動基盤、特に資金は史料ネットの規模でも不安定で、募金や研究費、助成金に頼らざるを得ない状況とのこと。また個人単位での動きが中心となるだけに、後継者の育成も大きな課題となっているようである。

以上、限られた紙数で史料ネットの活動の概略を紹介するに留まったが、宮城資料ネット等による救援活動のさらなる詳細について、また全国各地で活動する地元ネットについて、知っていただくきっかけとなれば幸いである。神戸においても、この16年間の怠りを反省しつつ、今後は平時から、平時こそ、分野をこえて連携してゆきたいと思っている。

## あの時の水戸芸術館、いま、そしてこれから

（水戸芸術館現代美術センター）  
高橋瑞木

地震発生当時、水戸芸術館現代美術センターではポストフェミニズム時代の女性作家の動向を探るグループ展「クワイエット・アテンションズ 彼女からの出発」展が開催中だったが、あいにく本展企画者の筆者は東京出張で水戸を留守にしていた。東京の交通が完全に麻痺していたため水戸に戻ることは早々に諦めたが、それにしても職場に電話が全く通じない。同僚と携帯電話のメールでやりとりをし、職員ならびにお客様が無事であることがなんとか確認できた。同時にギャラリーに損害があることも伝えられたが、携帯メールでは詳細な情報のやりとりをすることはできなかった。

福島第一原発の事故の影響もあり、筆者自身いつ水戸に戻ることができるとかは皆目見当がつかなかったが、避難先の知人のオフィスで即時に展覧会参加作家と作品を借用していたコレクターに水戸芸術館が被災したことをメールで告げ、状況が分かり次第すぐに連絡をすると伝えた。

その時に日本人作家に宛てたメールの文面があるので再掲しよう。

アテンションズ展参加日本人作家の皆様

この度の地震、皆様に被害がなかったことを願っております。／私は今日、有楽町で開催される「女性とアート」のシンポジウム聴講のため、東京に出張にきています。水戸に帰る交通手段が無いので、今は有楽町に知人とまだいる状態です。／水戸芸術館には何回か電話してみました、電話がつながりません。学芸員に携帯メールで様子を聞いてみましたが、ギャラリーの詳しい状況はまだ判明しておりません。／明日水戸に戻る交通手段が復旧したら、水戸に戻って様子を確認してまたご報告させていただきます。／みなさま作品のコンディションなど、大変ご心配か



被災当時の  
水戸芸術館現代美術ギャラリー  
写真：筆者

なお歴史資料ネットワークの連絡先は以下のとおり。

歴史資料ネットワーク  
電話 & FAX: 078-803-5565  
e-mail: s-net@lit.kobe-u.ac.jp  
ブログ: <http://blogs.yahoo.co.jp/siryonet>

と思いますが、非常時ということでご理解いただければ幸いです。／まだ余震が続いております。どうぞみなさま安全に気をつけてください。／高橋 瑞木 拝

結局、上野から水戸を繋ぐ常磐線が復旧することはなく、翌々日の日曜日につくばエクスプレスでつくばまで出て、臨時バスで水戸までなんとか戻ってきた。

水戸芸術館に到着してみると、ギャラリーでは天井の一部が落ち、ガラス窓が粉々に割れ、エントランスホールのパイプオルガンのパイプが落下していた。小林史子の放置自転車を使った大規模なインスタレーション作品の一部が天井と共に落下していた他、ドローイングの額に傷がついたり、立体作品の一部や機材が破損していたものの、ミニマルな作品が多かったため地震の大きさに比して作品の損壊は少なかったと言えるだろう。

たった2日間の不在の後に再会した同僚たちは憔悴しきっていた。聞くと、震災直後から水戸芸術館の会議場は近隣の人々の避難所となり、約250名の避難者を受け入れたという。水戸では電気と水道が止まり余震も多かった。そうした状況下で学芸員も24時間体制で食料や毛布を配布するなど、避難者対応に奔走したそうだ。

余震が頻発しているので、一刻も早く展示作品を撤収したかったのだが、ガソリン不足と道路の損壊のため、スタッフや展示作業業者を呼ぶこともできず、ひとまずは事態が収まるのを待ってから作品を撤収した。本来は5月のGW明けまでの展示期間だったため、会期半ばにして展覧会を閉じるのは、数年間の準備期間を経てオープンにこぎつけた作家や筆者にとっても痛恨であったが、建物の損害が激しく、復旧に時間がかかるかわった時点でやむを得ない判断だった。しかしこうした中でも「作品よりも人の命の方が大事」と理解を示し、中には謝礼を辞退し、寄付や額の修復費用まで申し出てくれた作家の気持ちには本当に感謝の言葉がない。

芸術館の修復の目処がつくのには時間がかかったため、夏に予定していた海外作家の個展はひとまず見送ることとなった。結局5月半ばを過ぎてから、7月に活動を再開することが決まり、急遽新企画「CAFE IN MITO—かわりの色いろ」を立ち上げること

が決まった。CAFE IN MITOは、2002年より断続的に開催されているグループ展で、街中で作品を展示する市街地回遊型の展覧会として認知されている。だが、頻発する余震や節電といった普段とは異なる状況の店舗の中で作品を展示することは、店主の心的負担が大きいだらうという懸念もあり、今回の作品展示は水戸芸術館のギャラリー内のみで行うこととした。そして水戸芸術館の開館以来20年の歩みの中で共に仕事をした作家（これも余震の不安があるため、主に平面作家）に声をかけ、協力を仰いだ。また、演劇部門が街中の飲食店でパフォーマンスや小演劇を開催したり、音楽部門がギャラリーの中で演奏会を行うなど、結果として美術、音楽、演劇の3部門を有する水戸芸術館ならではのユニークな企画になった。加えて会期中毎週水曜日を入場料無料とし、市民がより展覧会を訪れやすいようにしたことは、今回初の試みであった。

来館者のアンケートを見ると、水戸芸術館再開を喜ぶ声が圧倒的に多く、スタッフも励まされている。一見、水戸の人々の暮らしは震災以前と同じに戻ったように見える。だが、震災以前にすでに問題視されていた中心市街地の空洞化や、水戸への来訪者減少に今回の被災が拍車をかけていることは確かだ。そして、余震や原発事故への不安が、未だに強く人の心の中にわだかまっていることも。しかし、そういった状況だからこそ、芸術の、そしてアートセンターの可能性を作家や市民とともに改めて探ってゆく機会だととらえている。



被災当時の水戸芸術館現代美術ギャラリー  
写真：筆者

## ケアの場としての美術館

—認知症の方のためのプログラム—

ニューヨーク・マンハッタンの中心部から北へ地下鉄で30分。駅をおりて緑豊かな公園を歩いて行くと、高台にヨーロッパ中世の修道院が見えてくる。そこがメトロポリタン美術館の別館「クロイスターズ」だ。回廊や修道院を意味する名前のとおり、美術館

稲庭彩和子

(東京都美術館)

の建物は移築された5つの回廊からなり、タペストリーや彫像等ヨーロッパで世美術と美術館の建築自体を主たるコレクションとしている。館内に入ると美しく並ぶ回廊の柱と中庭の花々が来館者を迎える。庭の先に悠々と流れるハドソン川の対岸を臨めば、ニューヨークの森が見渡す限り広がる。この美術館からの景観を保持するために、対岸の土地はジョン・D・ロックフェラーによって買い上げられたという。

大都市ニューヨークの喧噪を忘れさせるこの美術館で、その日開催されたのは認知症の方向けのプログラムだ。「日常から抜け出して一休みしませんか。認知症の方とその介護者のためのプログラムです。」とチラシにはある。欧米では公共性の高い活動を目指し、障がいを持つなど美術館を利用しにくい状況にある方々を対象にした、いわゆるアクセス・プログラムを行っている館が数多くある。取り組みの早い美術館では1970年代から聴覚や視覚に障がいを持つ方を対象にしたプログラムが開発されてきたが、近年この分野で新たに力が入れられているのはアルツハイマー型認知症等、主に高齢者を対象としたものだ。高齢社会のなかで必然的にニーズが高まり、メトロポリタン美術館やニューヨーク近代美術館等で積極的な取り組みがなされてきた。メトロポリタン美術館の本館では以前から開催していたが、クロイスターズでもつい最近、新しいプログラムとして始まった。

2011年10月初旬。その日は平日の午後で、5組10名の方々が参加していた。美術館側はエデュケーターとボランティアの2人で参加者を迎える。一見すると元気そうなお老夫婦や、一方で、車いすの上で終始うつむいている方を連れた介護者もいる。認知症の症状の度合いも様々で、スタッフには臨機応変な対応が求められる。鑑賞が始まる前、つまり集合場所ですタッフと参加者が出会ったときから、このプログラムが何を大切にしているのか、スタッフの対応から感じられた。聞き取りやすい発話、ホスピタリティーのある言葉の選択や柔らかなボディランゲージによって、少し緊張気味の来館者も気持ちが和んでいく。まずはゆつくりと館内に進み、回廊の中庭に入り、豊富にあるハーブの話から始まる。参加者と会話をしながら、エデュケーターは草花に触れ、ハーブの葉をちぎり、香りをかぎ、見るだけではなく五感で体感していくように参加者にもすすめる。中庭にある植物は次に鑑賞していくタペストリー等の作品に描かれた植物ともリンクして、約1時間半のプログラムは、この美術館のコレクション全体の特徴を生かしたものになっていた。

このプログラムは認知症の方とその介護者の両方を対象としていることがポイントだ。介護者はこのプログラムに参加し、エデュケーターという他者だけでなく、同じ病を患う患者やその介護者といった問題を共有できる人々との関わりができる。いわゆる患者会等患者や家族が集う会で直接的に情報交換するのとは違い、作品を介して他者との関わりが生まれ、社会に開かれた回路が生まれる点が新しい。時を経た作品を紹介する事で、脈々と続く人々の営みや社会に、共に連なる感覚をも人々は共有する。孤独になりがちな介護者にとって、柔らかな対話を通して作品を他者と共有する事が、日常へ戻った時の力になるのではないだろうか。また、介護者は家族等の近親者ではなく、雇用関係にある場合もある。アメリカの場合、そうした介護者は普段は美術館に来館しないグループに属することが多く、美術館はこのプログラムを通して新たな層の人々の美術館利用の機会にもしたいと考えているようだ。

このプログラムは財政的には米国最大手の生命保険会社「メットライフ」の公共事業財団の支援によって成り立っており、参加者は入館料も含めて無料だ。メットライフ財団はメトロポリタン美術館やクロイスターズの他にも、ニューヨーク近代美術館で行われているプログラム「Meet Me」をはじめとしたアルツハイマー・プロジェクトを継続的に支援している。また、プログラムの開発においてはコロンビア大学のアルツハイマーに関する研究所と連携し、同様のプログラムに取り組む美術館同士は横の連携を持ってスタッフの研修等もしているという。

21世紀に入り、医療はますます高度化し、助けられる命が増えたことは幸いだが、障がいと共に生活をする人は増加傾向にある。日本でも特に障がい児は大幅な増加傾向



Sights & Scents, Gallery Tour

Programs for Visitors with Dementia at The Cloisters Museum & Gardens  
September-December 2011

## Sights & Scents



You are invited to a special program for individuals with dementia and their care partners or family members. Enjoy the serenity of enclosed gardens and peaceful views of the Hudson River and Fort Tryon Park. Be transported to the world of the Middle Ages by treasures from medieval manors and sacred spaces. Connect through discussion, drawing, and multisensory exploration of the beauty of medieval artwork and gardens.

See the reverse for schedule.

For more information, or to join our mailing list, email us, call (212) 450-2290 or email [visitor\\_services@thecloisters.org](mailto:visitor_services@thecloisters.org)

[www.thecloisters.org](http://www.thecloisters.org)

THE CLOISTERS

にあり、一方、高齢者も障がいの後天的に得て、その中で生活の質を保持したいと願い、またそこに関わる家族も増えているのだ。そのような状況の中、ここで紹介したような障がいを持つ方々が安心して健常者とともに参加できるプログラムは実際求められているのだろう。メトロポリタン美術館やニューヨーク近代美術館の事例でいえばこの種のプログラムはいつも予約がすぐにいっぱいになり高いニーズがあるという。

展覧会がマスを対象として多くの人々に作品を届ける活動であるのに対し、アクセス・プログラムはより個別に個人の社会へのかかわり合いの場を作り出し、学びとケアを促進する事業といえる。一度に対象とする人数が少なく、単純な費用対効果等通常の指標で考えてしまうと、実現が難しいと考えられてしまうだろう。しかし、参加した人そのものの数だけでなく、そのようなプログラムが美術館に存在するという事実が知れ渡っていく事自体も意味を持ち、美術館利用におけるノーマライゼーションやインクルージョンを促進することになるだろう。「美術館は私には関係のない場所」と思い続けている人に対し、プログラムが存在すること自体が「美術館はあなたにも関係するところかもしれない」というメッセージになる。アクセス・プログラム開発にはその分野についての専門知識も求められ、開発後も事業実施には継続的なマンパワーが必要とされる。こうした個別の事業の実現や発展にこそ、美術館の横の連携や外部組織との連携が必要なのだろう。

筆者が勤務する東京都美術館では1999年より「障がいをもつ方々のための特別鑑賞会」を特別展ごとに1回、休館日に開催している。館の職員はボランティアとともに当日までの準備をし、毎回1日で600人を超す来館者を迎える。「障がい者と健常者が、お互いが特別に区別されることなく社会生活を共にするのが正常なこと」とするノーマライゼーションの考え方からいうと、このプログラムは最終的な理想形ではないともいえるが、具体的な現在可能なプログラムを行いつつながら次なるより良い形を模索する機会と考えれば、非常に有効だと考えている。今後美術館に求められる学びとケアの機能を考える上でも、この分野の考察が必要な時代になっている。

## もつと野性を

### 「榎忠展 美術館を野生化する」

兵庫県立美術館、2011年10月12日―11月27日

(西宮市大谷記念美術館)

## 池上 司

神戸を拠点に40年以上にわたり前衛的な活動を続け、数々の伝説的なパフォーマンスや鉄の素材感をあらわにした彫刻で知られる作家、榎忠。その大規模な個展「榎忠展 美術館を野生化する」が、地元神戸の兵庫県立美術館で開催された。こうした前衛作家の取り組みが地元の公立美術館で評価、顕彰されるということは、関西の現代美術シーン全体を考えるとでもきわめて意義深い。

榎忠と言えはすぐに思い出すのは、体毛の半分を刈り上げてハンガリーに渡航した《ハンガリー国にハンガリー(半刈り)で行く》(1977年)、個展会場でバーのママに扮した《Bar Rose Chu》(1979年)、そして近作では、自らの手によって旋盤加工した無数の精密機械部品を積み上げ、幻想的な光景を創り出すインスタレーション《RPM-1200》(2006年)等の作品だ。ここに挙げただけでも、その活動を一口に言い表すことは容易ではない。実際に、近年開かれた主な展覧会を見ても、「その男、榎忠」(RPOキリンプラザ大阪、2006年)では、1970年代のパフォーマンスに関するドキュメント展示と当時最新作だった《RPM-1200》を対比的に示し、また「ギユウとチュウ 篠原有司男と榎忠」(豊田市美術館、2007年)では、同じく《RPM-1200》と大量のパトローネを使ったインスタレーションに主眼を置くといったように、それぞれ異なる角度から焦点を絞って紹介していた。では、榎忠にとって最大規模の展示となった今回の神戸での個展は、いったいどのようなものとなったのか。端的に言えば、それは近年の鉄の仕事を包括的に見せるものであった。

その背景には三つの条件があると思う。まず輸送が近距離であること、次に美術館の土地がかつて製鉄所であったこと、そして榎忠自身が神戸の廃材処理工場に長年勤めて



《AR-15》2000年  
写真撮影：豊永政史 (SANDWICH GRAPHIC)

いたこと、である。したがって、この企画は当初から、文字通り重量級の展覧会として準備されていたのだろう。観客の動線も通常とは異なる位置からスタートした。最初の展示室の入口まで迂回するように設けられた廊下には、アメリカと旧ソ連製の銃をかたどった数十丁の作品が、一列に並べられ、否応なく緊張感をあおる。そして室内には六台の大砲型の作品が無垢の鉄板を敷いた巨大な円形の台座に設置され、さらに壁を隔てた奥のスペースには無数の実弾の莖莖が鈍い光を放ちながら床の上に山と積み上げられていた。ここには実物とフェイクという対比もあるが、同時に兵器として見るか、金属の造形物として見るか、という問いも用意されている。莖莖のいくつかは床の上に意図的に立てられ、台座の上に置かれているものもあった。また銃の形をした作品には「Made in Kobe」「USDF」という作家独自の刻印がなされ、その鑄型とともに展示されることで、兵器としての機能を持たない造形物であることを明らかにしていた。前者の刻印は戦前から続く神戸の製鉄の歴史に言及するもの、そして後者はLife Self Defense Forceという榎忠による造語の略であり、美術的な視点から模造することで、社会への警鐘を発しながら兵器を無力化するという、この一群の作品に託されたメッセージとして理解することができる。

次の展示室では、鉄という素材の多様な形態が示されていた。《ギロチンシャー1250》は想像を絶する力で裁断された鉄の破片、《SALAMANDER》は溶解された不純物を含む鉄の塊、そして《BLOOM》は再処理され溶鉱炉から引き出された時の鉄の状態で、上部が開いた花のような形をしている。驚いたのは、それらの表情が柔らかく変化に富み、生命感すら漂わせているように見えたことだ。手を加えることなく、生の鉄の姿のうちに美を見出すこと。それは日常生活の中で鉄に接してきた者にしか知ることのできない重みである。それほど大きくはないスペースであったが、ここには鉄の作家としての榎忠の美学とも呼ぶべき視点が凝縮されていたように思う。さらに言えば、破壊から再生へという鉄の一生のようなプロセスは、1995年の阪神・淡路大震災とその後の復興を想起させるものでもある。これらのインスタレーションは、榎忠が自らの日常へと深く静かに意識を掘り下げていった姿勢をのぞかせる。

展示はそこから後半へと進み、最後に《RPM-1200》の部屋へと入るのだが、その配置の仕方はこれまでに見たような円形ではなく、壁際に沿わせて細長の矩形に作り上げられていた。この展示方法には疑問が残った。正面から眺めると、それはまるで奥行きのない絵画のようであり、本来ならば、常軌を逸する規模の立体的なドローイングとして圧倒的な存在感を放つはずの作品が、その姿を矯められてしまったようにも感じられたからである。そしてもう一つ、活かされていない作品があった。それは莖莖からギロチンシャーへと向かう途中のドローイングの小部屋にかけられていた《ハンガリー国にハンガリ(半刈り)で行く》のポートレート写真である。ドローイングとほぼ同時期の代表的な作品ゆえに、ここに展示されていたのかもしれない。しかし観客のほとんどは、その意味が分からぬまま通過してしまっていたのではないか。また廊下に設けられたビデオコーナーでは、半刈りやローズ・チュウ、榎忠が勤めた工場でのワークショップ等貴重な映像が流されていたが、それらすべてを見通すことは時間的にほぼ不可能で、かつよく知る人でなければ、ビデオの中の女装した榎忠と鉄の作家としての榎忠の関連性を汲み取ることは、これもまた不可能に近い。展示に組み込むのであれば、もっと分かりやすく提示する方法はあるだろう。あるいは、それは見せなくてもよいのだ。今回の個展では、鉄の作家としての榎忠のすべてを見せる。それならそれで、鉄の展示という枠内で、もっと冒険してもよかつたのではないか。なぜなら、美術館の中にきれいに収まってしまった榎忠は、ストイックであるが何か足りない。その最大の魅力は、制御できない衝動のような激しさや大胆さ、あるいは「野生」とも呼ぶべき爆発的なエネルギーの中にこそ見出されるものではなかったか。



《RPM-1200》2006-2011年  
写真撮影＝豊永政史  
(SANDWICH GRAPHIC)

## 逢坂恵理子

# 05

第1回横浜トリエンナーレのカタログ挨拶には、『横浜トリエンナーレ2001』は、新世紀が始まる2001年を機に新たな文化創造を目指して企画されました。―中略―横浜トリエンナーレは世界のアートの最前線を日本に紹介するとともに、自らの位置を確認し、また日本から世界へ文化を発信していくまたない機会となるでしょう。―そして「トリエンナーレは、この国際文化都市・横浜の新たな魅力のひとつになるにちがいありません。―と記されている。<sup>※1</sup>

横浜トリエンナーレは国際交流基金の発案により、日本の近代化とともに発展してきた横浜を舞台に、2001年9月、ナショナル・プロジェクトとして開催された。主催者は、国際交流基金、横浜市、NHK、朝日新聞社によって構成される横浜トリエンナーレ組織委員会である。

戦後目覚ましい経済発展を遂げたにもかかわらず、日本では1990年代になっても同時代の文化を多角的に紹介する文化発信政策は後手にまわっていた。国際社会での存在を示すには自国の文化を伝え国際交流を促す文化的発信の力は必要条件ともいえる。隣国の韓国では、1995年に光州ビエンナーレが韓国政府の文化政策の一環として始まったが、日本では、政府主導による大規模な国際展開の機が熟すには21世紀の声を聞くまで待たなければならなかった。経済大国の日本はアジアの中でも後発ともいえる国際展開である。

1999年には、福岡アジア美術館トリエンナーレが福岡アジア美術館の開館を機に開始され、続く2000年には越後妻有アートトリエンナーレが、そして、2001年には横浜トリエンナーレが始まった。2010年にはあいちトリエンナーレと瀬戸内芸術祭が第1回を迎え、多くの来場者を惹きつけて成功裏に閉幕している。現代美術の祭典ともいえる国際展は、1895年に開始されたヴェネチア・ビエンナーレを皮切りに、いまや世界各地で開催されており、その数は大小合わせ100とも200とも言われている。

21世紀最初の10年間、日本では堰を切ったように多くの現代美術国際展が始まったが、一国で実施される国際展の開催数は日本が最も多い。しかしその一方、日本では継続できない国際展数も多いのだ。現在は、いわば国際展ラッシュともいえる現象で、主催者は地方自治体や美術館、民間組織によって編成される実行委員会形式が主流である。また、2年に一度のビエンナーレではなく、3年に一度のトリエンナーレが主流であるのも日本独特の傾向だ。増加の理由は文化振興だけでなく、都市再生や観光資源としても現代美術の大型国際展の潜在力が着目されていることにもよるだろう。

こうした潮流にあって、横浜トリエンナーレは、政府主導の大都市型現代美術の祭典としては日本での先駆けともいえるものだった。しかし初回はともかく、横浜トリエンナーレは、2回目以降、毎回、展覧会の準備期間不足という事態を繰り返してきた。その理由のひとつは、定例会場がないために、新たに会場を準備、整備するのに時間がかかるということであった。初回以来、パシフィコ横浜、赤レンガ倉庫、横浜山下埠頭の倉庫、新港ピア、日本郵船海岸通倉庫、大棧橋客船ターミナル、三溪園、ランドマークタワー等、実に多様な場が会場となったが、過去3回、横浜トリエンナーレの会場として横浜美術館が参画することはなかった。

第4回横浜トリエンナーレの開催に向けて、2009年4月の時点では、横浜美術館を主会場のひとつとしたいという横浜市の方向性は示されていたものの、その夏以降、横浜市長の突然の辞任、事業仕分けによる国際交流基金の主催者からの撤退という予期せぬ事態に加え、横浜美術館にとっては指定管理業務外事業のための内部調整等の課題が続出し、事務局開設の見通しがたない状態が長く続くことになった。横浜トリエンナーレのソフト部分Ⅱ展覧会準備は国際交流基金、ハード部分Ⅱ会場の準備は横浜市という役割分担で進めてきた横浜市にとっても、国際交流基金の撤退は予算上の影響

※1 横浜トリエンナーレ2001図録  
(発行：横浜トリエンナーレ組織委員会) p.6



イン・シウジェン  
《ワン・センテンス》2011  
Courtesy ALEXANDER OCS GALLERIES BERLIN | BEIJING  
オノ・ヨーコ  
《テレフォン・イン・メイズ》2011 展示風景  
©2011 Yoko Ono  
Photo by KIOKU Keizo  
Courtesy of Organizing Committee for Yokohama Triennale



ウーゴ・ロンディノーネ  
《月の出、東》2005  
Courtesy the Artist and Galerie Eva Presenhuber, Zurich  
©the Artist  
Photo by KATO Ken  
Photo courtesy of Organizing Committee for Yokohama Triennale



# 『ZENBI』では、 次の要領で広く皆さんからの 原稿をお待ちしています。

## 【原稿の内容】

- ・ 展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・ 原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。

## 【投稿の資格】

- ・ 全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・ 匿名の投稿は受けつけません。

## 【投稿に係る詳細】

- ・ 原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

## 【締切】

- ・ 第2号(平成24年7月発行予定) に関しては4月15日、第3号(平成25年1月発行予定)については10月15日を締切とします。(当日必着)

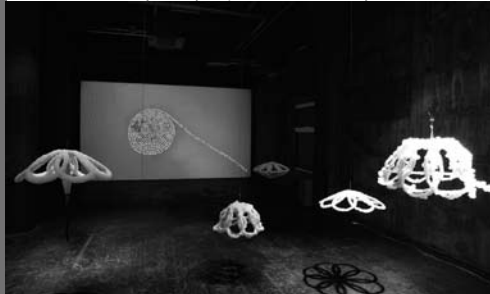
## 【提出先】

- ・ メールの場合  
zenbipress@yahoogroups.jp
- ・ 郵送の場合  
606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町  
京都国立近代美術館内  
全国美術館会議ニュース研究部会  
幹事 松山利光

## 【問い合わせ先】

内容に関する問い合わせは下記に御連絡ください  
680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館内  
全国美術館会議ニュース研究部会  
幹事 尾崎信一郎  
E mail: s-osaki@pref.tottori.jp

「マジック」としか言いようがない。  
15%節電も実行しながら83日間に及んだトリエンナーレは11月6日に閉幕。震災後、入場料を下げ、開館時間を短縮し、予想入場者数も下方修正して臨んだものの、最終的には予想を大幅にしのぐ33万人以上の来場者を得ることができたのは本場に幸いである。  
今年10年目の節目を迎えた横浜トリエンナーレは、国から横浜市へ主軸が移り、横浜美術館が初めて主会場のひとつになるなど、まさに転換期となった。前述したようにすでに多数の国際展が開催されている現在、横浜トリエンナーレの特徴をあげ、国際的にも発信してゆくのは容易ではないだろう。しかし本トリエンナーレは、継続してゆけば、横浜市の「新たな魅力」となるのは間違いない。そのためには、専門家の育成とともに、横浜市が苦手とする継続可能な内部システムの構築と早期からの準備は不可欠だ。横浜トリエンナーレの本場の正念場は次回の2014年である。



シガリット・ランダウ  
《死視》2005  
《棘のある塩のランプ》2010 展示風景  
Courtesy Kamel Mennour, Paris  
Photo by KIOKU Keizo  
Photo courtesy of Organizing Committee for Yokohama Triennale

しかしながら、キック・オフできたのは昨年10月で、開幕まで10カ月しかないという切迫した準備に更に追い打ちをかけたのが、東日本大震災であった。未曾有の被害状況を知るにつれ、予定通り開催できるかどうか、計画停電、保険料高騰、資材不足、輸送の確保等様々な検証が必要となり、先行きが見えない事態が生じた。こうした苦しい非常時を乗り越え、4回目を迎えたヨコハマトリエンナーレ2011「OUR MAGIC HOUR—世界はど、こまで知ることができるか?」は予定どおり8月6日に開幕したが、初日を迎えることができたのは、二木さんの奮闘とかかわったスタッフ全員の努力による。



ジュン・グエン=ハツシバ  
《呼吸は自由 12,756.3 : 日本、希望と再生、1,789km》2011  
Courtesy the Artist and Mizuma Art Gallery, Tokyo

■ 将来の愛好家育成を意識した、ジュニア・プログラムを実施する。

しかしながら、キック・オフできたのは昨年10月で、開幕まで10カ月しかないという切迫した準備に更に追い打ちをかけたのが、東日本大震災であった。未曾有の被害状況を知るにつれ、予定通り開催できるかどうか、計画停電、保険料高騰、資材不足、輸送の確保等様々な検証が必要となり、先行きが見えない事態が生じた。こうした苦しい非常時を乗り越え、4回目を迎えたヨコハマトリエンナーレ2011「OUR MAGIC HOUR—世界はど、こまで知ることができるか?」は予定どおり8月6日に開幕したが、初日を迎えることができたのは、二木さんの奮闘とかかわったスタッフ全員の努力による。

■ 現代美術の愛好者の枠を広げられるよう、感覚に訴える作品、子供が反応する作品を導入部に設置する。

■ 美術以外のジャンル、音楽、演劇、ファッション、映画、古典芸能と現代美術をつなげる関連プログラムを充実させる。

■ 将来の愛好家育成を意識した、ジュニア・プログラムを実施する。

■ 子供、学生、親子連れが来館しやすいように、立ち上がりを8月にする。

■ 主会場を拡大せず、コンパクトで質の高い展示を目指す。

■ 横浜市創造都市政策から生まれたNPOと連携して、BankART Lifeや黄金町バザールとの共通チケットをつくり、横浜トリエンナーレならではの広がりをつくる。

■ 時代を越えた作品、現代美術以外のジャンルの作品、そして横浜美術館のコレクションを組み合わせ、現代美術を異なる視点から照射できるようにする。

※2 展覧会コンセプト等については、ヨコハマトリエンナーレ2011 図録(発行:株式会社美術出版社)を参照されたい。

